

『満洲実録』のモンゴル語における表記上の特徴

烏燕嘎

The Characteristics of Mongolian Figure and Spelling in *Man-Chu Shih-Lu*

Uyanga

要旨

『満洲実録』(1781年)は18世紀に皇帝の命令によって編纂された清太祖の実録であり、当時の規範性が高いモンゴル語の文章語と考えられる。しかし、清太祖の実録は『満洲実録』以前にも、何回か編纂されている。本稿では、文献学的研究と言語学的研究の両面から、『満洲実録』のモンゴル語はどのような特徴を持っているか、その編纂に際して、乾隆時代以前に編纂された実録のモンゴル語を継承している可能性があるかどうかについて検討した。

『満洲実録』は1781年に清朝の皇帝の命により、文人たちを集めて編纂したものであり、そのモンゴル語は、当時の公的な規範を示そうとした書き言葉とみなすことができる。文献研究からは、『満洲実録』のモンゴル語より前に、少なくとも一つのモンゴル語の太祖実録があったことが分かった。言語学的特徴からは、出現回数の多い規則的な現れ(特徴)と並んで、出現回数の少ない例外的な表れが見られる。出現回数の多い規則的な現れは、当時のモンゴル語の規範を示しているとみなすことができる。少数の例外的な現れは、より古い時代の特徴が残存しているものであることが考えられる。そのため、『満洲実録』のモンゴル語の編纂に際してはそれ以前の何れかの清太祖実録に基づいて編纂された可能性が高い。

キーワード: 『満洲実録』のモンゴル語、清太祖の実録、表記の特徴

1. はじめに

『満洲実録』は数種類の清太祖実録の中で現在モンゴル語が見られる唯一のものである。清朝の太祖ヌルハチから乾隆帝までは、多くの満洲族の支配者がモンゴル語に精通し、両民族の言語・文化が互いに影響されていた時期である。このような歴史的背景の中で、『満洲実録』は1781年に乾隆帝の命により、編纂されたものである。

従来の『満洲実録』に関する先行研究は文献学的研究と言語学的研究の二つに分けることができる。文献学的研究として最も注目されるのは、松村潤[2001]である。そこでは4種類の実録の文献学的な特徴を検討して、さらに、清太祖実録と『旧満洲檔』・『満文老檔』との関係を明らかにした。清太祖実録のモンゴル語の作られた状況についても触れているが、詳しくない。これ以外にまた、陳捷先[1978]の研究などがあるが、『満洲実録』の満文の価値及び満文実録の歴史的位

置付けについて論じているのが多く、モンゴル語の作られた経緯について注目されていない。

言語学的研究として、山崎忠[1950]、今西春秋[1992]、早田清冷[2008]などが知られる。山崎忠[1950]は『満洲実録』のモンゴル文を満洲文・漢文と対照して、主に単語と語句の対応・解釈を行った研究である。そこには、第1巻の1頁から121頁まで、第一巻の半分程度に現れる語尾の使われる状況に言及した。例えば、与位格語尾<-dür/-tür>については、使い方が不統一であると説明したが、使われる状況と特徴について、詳細を明らかにしていない。今西春秋[1992]は『満洲実録』の満洲文とモンゴル文をローマ字転写して、それぞれに日本語訳を付けた。満文と蒙文の対応する文章を見開きの頁に配置したため、満洲語とモンゴル語を比較するのに便利である。モンゴル語の特徴を明らかにしていない。

本稿では、まず、従来の清太祖実録の文献研究を踏まえ、『満洲実録』のモンゴル語の作られた状況を明らかにする。次に『満洲実録』のモンゴル語の表記上の特徴を明らかにして、『満洲実録』のモンゴル語の特徴、及び『満洲実録』が乾隆時代以前に編纂された実録のモンゴル語を継承しているかどうかを検討する。

本稿では主に現代モンゴル文語、及びN. POPPEの文法書を参照しながら、『満洲実録』のモンゴル文語の表記の表れを計量的な観点から分析する。その際出現回数の分布（傾り）により、その特徴を分類して検討する。出現回数が圧倒的に多いものを規範を示す特徴と見なし、出現回数が少ないものを規範から外れる例外的な特徴と見なす。出現回数で拮抗する特徴は、自由に交替して使われる規範が確立されていない特徴と見なす。特徴の性格を明らかにする際、通時的な検討を行う。

『満洲実録』は、満洲族の発祥伝説から始め、太祖ヌルハチが1583年に兵を起してから、死去するまでのアイシン国(後金)内外の動向が主要な内容である。特に、ヌルハチが女直各部を統合して、明に侵攻し、モンゴル諸部と往来した内容が詳しい。

体裁としては、満洲語、漢語、モンゴル語の三言語併用である。一頁を上中下の3段に分け、上段に満洲語、中段に漢語、下段にモンゴル語を配置する。全8巻1671頁¹の大量な文字内容から成る。一頁7行か8行で、172頁の挿絵が挿入されていることにより、「中国歴代の皇帝の実録では特殊な体裁を持つ文献である」²。

上原久[1960]によれば、現存している『満洲実録』は3種類ある。それらをそれぞれ旧北京故宫本(中国第一歴史档案館所蔵)、旧奉天故宫本(瀋陽故宫博物館所蔵)、旧熱河離宮本(河北省熱河避暑山莊所蔵)と呼ぶ³。本論では、簡略化して「旧」を取り、それぞれ「北京故宫本」、「奉天故宫本」、「熱河離宮本」と呼ぶ。熱河離宮本については、編纂が始まったという情報はあがるが、現物の所在は知られていない⁴。影印本として利用できるものは、北京故宫本と奉天故宫本である。二つの影印本を比較してみたところ、内容と語句はほとんど同じであるため、言語学的研究を行うには二つの異本のいずれをも底本として利用することができる。

モンゴル語のローマ字転写方式は、N. POPPE[1974]に以下の変更を加えた：

¹ 1丁の表と裏をそれぞれ1頁として数える。

² 陳捷先[1978: 83]。

³ 上原久[1960: 5]。

⁴ 上原久[1960: 6]。

(1) 母音字<o><u>と<ö><ü>は字形で区別されないため、ローマ字転写の便利さを考え、第二音節以降の男性語の円唇母音字は<u>で転写し、女性語の円唇母音字は<ü>で転写する。

例：ᠯᠢᠦᠭᠦᠳᠦᠨ liyuudung (1:104:4) 「遼東」

(2) 母音字の前の<n>には点がない場合は<n'>で転写し、点がある場合は<n>で転写する。また音節末の子音字<n>に点がある場合は<n'>で転写し、点がない場合は<n>で転写する。これは現代モンゴル文語の綴りに基づいて、例外的なものを<'>の記号を付けて表記するものである。

例：ᠨᠠᠶᠠᠳᠤᠨᠠᠷᠠᠨ n'ayad=u_r_a(1:024:5) 「遊びに」

ᠨᠡᠨᠳᠡᠨ en'de=n(1:070:5) 「間違えて」

(3) モンゴル文語では、子音字<t>と<d>は同じ字形を持つと言われる。ᠲ ᠳ で始まる派生的な接尾辞について、ローマ字転写で文字の字形を再現出来るようにするため、接尾辞頭の ᠲ は<d>で転写し、接尾辞頭の ᠳ は<t>で転写する。

例：ᠳᠤᠮᠳᠠᠳᠤ dumda_du(1:184:6) 「中位の」

ᠲᠦᠰᠢᠶᠡᠲᠦ ᠲᠦ ᠲᠦ ösiy_e_tü(1:196:6) 「仇敵の」

(4) 綴り上の特徴をはっきり示すため次のような補助記号を使っている。

「_」(アンダースコア)：一つの語が分かれて書かれている場合、その境界を表す。

例：ᠳᠡᠭᠡᠷᠡᠭᠡ deger_e(1:004:3) 「上」

(5) 出現位置

出現位置を示す数字は順に巻、頁数、行番号を表す。例：1:005:8

2. 『満洲実録』における文献学的研究

清朝の太祖であるヌルハチの生涯を記した実録とその現存状況は、次の4種類である。

- ① 崇徳初纂本の『太祖太后実録』(1636) 記録のみ
- ② 順治重修『太祖武皇帝実録』(1655) 満漢
- ③ 康熙改修『太祖高皇帝実録』(1686) 満漢
- ④ 乾隆四十六年(1781)の『満洲実録』満漢蒙

以上の4種類の太祖実録におけるモンゴル語の情報については、以下のように整理することができる。

① 崇徳初纂本の『太祖太后実録』

『太祖太后実録』は最初に編纂された清太祖実録であるが、記録のみで実物は現存しない。

太宗ホンタイジの天聰年間(1627-1636)に、太祖実録の編纂が始められた。この実録が満・漢・蒙三言語からなっていたことは、告成の際に国史院大学士、hifi(希福)・Garin(剛林)・羅繡錦によって読みみ上げられた次の表文の内容から知ることができる。⁵

gosin onco hūwaliasun enduringge han ejen i hesei dergi taidzu, abkai hese be alifi forgon be mukdembuhe, gurun i ten be fukjin ilibuha, ferguwecuke gungge gosin hiyoošungga horonggo enduringge hūwangdi, dergi teiheo gosin hiyoošungga doro de akūmbuha, ginggun ijishūn hūturingge eldengge enduringge hūwangheo i yabuha yargiyan kooli be, manju monggo

⁵ 以下の文章は『旧満洲瑣』第十冊、5297頁、字字瑣の崇徳元年十一月十五日の記事を松村潤が『清太祖実録の研究』[2001:2]に書いたものによった。松村潤はこの表文の出典を5297頁と註につけたが、引用した文章は5298頁の6行目から5300頁の1行目にある。

nikan ilan gurun i gisun bithe arame wajifi, tumen jalan I suduri obuha, wesihun erdemunge i sucungga aniya omŝon biyai tofohon de.

寛温仁聖皇帝陛下の旨により、上の太祖承天廣運聖徳神功肇紀立極仁孝武皇帝、上の太后孝慈昭憲純徳貞順成天育聖皇后の実録を、満洲、蒙古、漢三国の文で完成して、萬世の史とした。崇徳元年十一月十五日。

上の文章の下線部から、『太祖太后実録』は満漢蒙三文で書かれていたことが分かる。

しかし、この満漢蒙三種の『太祖太后実録』は上述のように現在に伝わらない。

② 順治重修『太祖武皇帝実録』

『太祖武皇帝実録』は現存する最も古い太祖実録である。満漢本だけで、蒙文は存在しない。

『太祖太后実録』は順治年間に改訂され、順治十二年（1655年）二月に告成された。序、表、凡例、目録はない。

③ 康熙改修『太祖高皇帝実録』

『太祖高皇帝実録』は1686年に告成されたもので、その序文によれば、満洲語と漢語の編纂官員以外、蒙古文の修纂官として3名が挙げてあり、蒙古文の校閲官にも12名が挙げられている。

『太祖高皇帝実録』は満文本・漢文本であり、蒙文本は現存しないが、編纂官員・校閲官がいた記録があることから、蒙文本が作成された可能性がある。

松村潤によれば、これは『武皇帝実録』に新たに序・表・凡例・目録・編纂官員の名簿を加えたものだが、順治重修の『武皇帝実録』と比べるときわめて大幅な改変があったという。

④ 乾隆四十六年（1781年）『満洲実録』

『満洲実録』は、満洲語、漢語、蒙古語の対訳の体裁を取っている。清太祖実録の中で、モンゴル語が見られる唯一の実録である。一頁を上中下の3段に分け、上段に満洲語、中段に漢語、下段にモンゴル語を配置し、全8巻1671頁、一頁7行か8行で、172頁の挿絵が挿入されている特殊な体裁を持っている。中国歴代の皇帝の実録では図を一部の内容としたものは『満洲実録』しかない。

松村潤[2001]によれば、『満洲実録』は乾隆年間に、乾清宮に所蔵されていた盛京時の旧本即ち崇徳初纂本の『太祖太后実録』に基づいて、文字のない『太祖実録戦図』（1636）を加えて、重繪された。しかし、崇徳初纂本をそのまま重繪したものではなく、順治重修本によったという。

以上の内容でモンゴル語の状況をまとめれば、以下ようになる。

最初に編纂された『太祖太后実録』は原本が残っていないが、蒙文が作られたという記録がある。その次の順治重修『太祖武皇帝実録』はモンゴル語が、存在したかどうか、知ることはできない。三番目の康熙改修『太祖高皇帝実録』に関しては、蒙文本は現存しないが、序文にモンゴル語の編纂人員の名前が記録されていることから、モンゴル文が作成された可能性がある。最後の乾隆四十六年（1781）の『満洲実録』はモンゴル語が見られる唯一の清太祖実録である。

これにより、崇徳初纂本の『太祖太后実録』には蒙文があったという記録から『満洲実録』のモンゴル語より前に、少なくとも一つのモンゴル語の太祖実録があったとすることができる。そ

のため、『満洲実録』のモンゴル語の編纂に際してはそれ以前の何れかの清太祖実録に基づいて編纂された可能性が高い。

3. 『満洲実録』におけるモンゴル文字の表記の特徴

本稿では、『満洲実録』のモンゴル文字の表記の特徴を取り上げて、『満洲実録』のモンゴル文語の特徴を明らかにする。

『満洲実録』は18世紀に皇帝の命令によって編纂された清太祖の実録であり、当時の規範性が高いモンゴル語の文章語と考えられる。18世紀の文人たちの作った『満洲実録』のモンゴル語はどのような特徴を持っているのか。そのモンゴル文語の字形と綴りは統一しているか、それともその中に異なった現れが含まれているか、異なった要素が含まれている場合には、それらの特徴と性格について検討し、言語学的特徴を明らかにする。

ここでは、『満洲実録』のモンゴル語の表記を「字形の特徴」と「綴りの特徴」に分けて検討する。

3.1 『満洲実録』におけるモンゴル文字の字形の特徴

「字形の特徴」は、母音字と子音字それぞれの表記の特徴を言う。

『満洲実録』に現れる母音字の字形は現代モンゴル文語の字形と同じである。現代モンゴル文語と異なる字形の特徴は主に子音字に現れる。それらを列挙すれば、以下のようである。

(1) 子音字<n>の点を持つ表記と点を持たない表記

現代モンゴル文語では、子音字<n>は母音字の前に位置する場合、点を伴った字形 ᠨ (頭位形) ᠨ (中位形) が使われ、子音字の前に位置する場合、点のない ᠨ が用いられる。

『満洲実録』では、子音字の前に位置する子音字<n>は現代モンゴル文語と同じく点を持たない。

しかし、子音字<n>は母音字の前に位置する場合、点を持つ字形が827回表れ、点を持たない字形は23回現れる。点を持たない字形は、頭位形に15回、中位形に8回現れる。

本稿では、母音字の前の点のある<n>と子音字の前の点のない<n>を<n>で転写し、異なる場合は<n'>で転写する。

奉天故宮本では、母音字の前の頭位形に現れる点のない子音字<n'>は ᠨ n'oyan 「貝勒」の語幹に6回現れる。これらは北京故宮本では、すべて点を付けた ᠨ で現れる。これ以外の、奉天故宮本の第一巻に現れる ᠨ n'uγun 「小さい男の子」(3回)、 ᠨ n'ayadu-r_a 「遊びに」(2回) ᠨ n'ijeged 「一人ずつ」(1回) は、北京故宮本でも点のない表記で現れる。頭位形に現れる母音字の前の点のない子音字<n'>は第1巻に限って、二つの異本で同じ6箇所現れる。このことから見れば、点のない<n>は古い特徴を残存している可能性がある。例：

ᠨ noyad(1:077:2) 「貝勒たち」

ᠨ sonus=čū(1:053:6) 「聞いて」

ᠨ n'ayadu=r_a(1:024:5) 「遊びに」

上に提示した数から見れば、子音字<n>の母音字の前の点を持つ表記は、『満洲実録』の編纂された時期の特徴だと言える。

母音字の前の点がない表記は、『満洲実録』を編修するとき、母音字の前の子音字<n>を点をつ

けた表記で統一しようとしたが、統一から漏れた古い表記の可能性はある。

(2) 子音字<p>の表記 𐰞

現代モンゴル文語では、母音字の前に現れる子音字<p>は 𐰞 で表記される。

『満洲実録』では、子音字<p>を 𐰞 字形で表記する。例：

𐰞 pou(7:010:2) 「砲」

𐰞 ping(7:019:8) 「(平夷門の) 平」

栗林均[2006:前書きx]によると、𐰞 の字形は、13・14世紀のモンゴル文字にはなく、もっぱら擬音語、擬態語や外来語の音を写すために新しい時代に作られたものである。

『満洲実録』では、現代モンゴル文語の子音字<p>の字形 𐰞 は一切現れない。

(3) 子音字<y>の点を持たない字形

現代モンゴル文語では、子音字<y>が、母音字の前(音節頭)では、点を持つ字形 𐰢 𐰣 𐰤 で、子音字の前(音節末)では、点のない表記 𐰢 𐰣 𐰤 である。

『満洲実録』では、子音字<y>は、母音字の前でも、子音字の前でも全て点を持たない 𐰢 𐰣 𐰤 が用いられている。

子音字<y>は一貫して点を持たないため、本論文ではこれを<y>で転写する。例：

𐰢 yurban(7:020:2) 「三つの」

𐰢 qayaḷ_a(7:022:3) 「門」

𐰢 jarḷay(7:021:6) 「仰せ」

上に提示した数から見れば、子音字<y>母音字の前の点を持たない表記は、『満洲実録』の編纂された時期の特徴だと言える。

(4) 子音字<s>の末位形の 𐰢 字形

モンゴル語の文献では、子音字<s>の末位形に 𐰢 の字形が現れる。中絶末位形には 𐰢 と 𐰣 の字形が現れる。

『満洲実録』で子音字<s>の末位形には、多くの場合 𐰢 の字形が用いられる。𐰢 は<basa>「また」、<ese>「否定詞」の2語にしか現れない。「否定詞」<ese>は全巻で、148回現れる。その内、𐰢 は計138回現れ、𐰣 は計10回現れる。

本稿では、出現回数の多い 𐰢 の字形を<s>で表記し、少数現れる 𐰣 字形を<s'>で転写する。例：

𐰢 ulus (4:020:1) 「国」

𐰢 es_e (4:022:1) 「～ない、～しない」

𐰣 es'_e(4:008:2) 「～ない、～しない」

N. POPPE [1974:23]では、子音字<s>の末位形の以上の二つの字形について、「𐰣 は古典式モンゴル文語⁶に現れ、𐰢 は古代の文献に使われる」と述べている。『満洲実録』では子音字<s>の末位

⁶ モンゴル語の歴史は、N. Poppe [1954:4-5]によれば、13世紀までの原始モンゴル語(Ancient Mongolian)、以後16世紀末までの中期モンゴル語(Middle Mongolian)、およびそれ以降の近代モンゴル語(Modern Mongolian)

形に𐰃字形が数多く現れることからみれば、𐰃はただ古代の文献に使われていたとは言えない。

(5) 子音字<y>の頭位形と中位形 𐰃 (カギがない) の字形

現代モンゴル文語では、子音字<y>の頭位形と中位形は𐰃で表記する。

『満洲実録』では、子音字<y>の頭位形も、中位形も𐰃 (カギがない) の字形が用いられる。

モンゴル語の文献では、先古典期モンゴル文語にはカギのない𐰃が現れる。

本稿では、単語の意味によって、頭位形𐰃の字形を子音字<j>と<y>を区別して転写する。例：

ᠶᠠᠪᠦᠳᠠᠯ yabudaᠯ (7:130:3) 「事」

ᠶᠤᠮᠠᠰᠤ ᠪᠠᠰᠤ yuyu=basu (1:197:1) 「請えば」

ᠶᠠᠷᠯᠠᠶ jarlay (7:021:6) 「仰せ」

『満洲実録』の<y>がカギがない 𐰃 で表記されているのは、古風なモンゴル語の特徴が現れている。

(6) 子音字<č>の中位形に現れる 𐰃 の字形

現代モンゴル文語の子音字<č>の中位形は𐰃で表記する。

『満洲実録』では、子音字 <č> の中位形の 99%は現代モンゴル文語と同じく 𐰃 と表記されるが、単語 öč'i=「言え～」の中位形の<č>が30回現れる中、5回は𐰃 (<j>の語中の字形) で現れている。ここでは、子音字<č>の中位形は𐰃の表記と異なるため、<č'>で転写する。例：

ᠥᠴᠢᠨ ᠪᠡᠰᠦ öč'i=besü (7:129:4) 「言えば」

ᠪᠡᠯᠴᠢᠷ belč'ir (5:019:4) 「合流地点」

斯琴高娃[2007]によれば、先古典期モンゴル文語の子音字<č>は全て 𐰃 の字形で表記される⁷。

先古典期モンゴル文語が記される文献から分かるのは、<j>𐰃、<č>𐰃の形は区別されていなかった、両方とも 𐰃 の形で表記されていたということである。

『満洲実録』では、子音字<č>の規範となる表記は𐰃であるが、例外的に 𐰃 も使われるという事は、古い特徴が現れていると推定できる。

3.2 モンゴル語の綴りの特徴

『満洲実録』の綴りの主な特徴は以下の二つに分けられる。つまり、語末の母音字<a/e>の表記と、派生的な接尾辞の表記である。

次に、『満洲実録』のモンゴル語の綴りを現代モンゴル文語の表記と比較して検討する。

3.2.1 語末の母音字<a/e>の綴りの特徴

『蒙汉词典（増訂本）』（1999）によれば、現代モンゴル文語では、母音字<a/e>は子音字<q, γ, n, m, y, r>の後に離して書かれる。少数の語の場合、繋げて書かれる。また母音字<a/e>は<l>

の3段階に区分される。そして、N. Poppe [1954: 14-16]によれば、モンゴル文語の歴史も三段階に分けられる：即ち13世紀から16世紀までの先古典期モンゴル文語、17世紀から20世紀初めまでの古典期モンゴル文語、それ以降現在に至るまでの現代モンゴル文語である。その内、「古典式モンゴル文語」は、木版の経典で規範化が進められた文章語を言う。

⁷ 斯琴高娃[2007: 37]

の後に繋げて書かれる。ただ、少数の語と活用語尾の $\text{ᠯᠠ} <=l_a/=l_e>$ 、 $\text{ᠬᠤᠯᠠ} / \text{ᠬᠤᠯᠢ} <=qul_a/=kül_e>$ 、 $\text{ᠲᠠᠯᠠ} <=tal_a/=tel_e>$ の場合は離して書かれる。

現代モンゴル文語のこの特徴と比較して、『満洲実録』の語末の母音字<a/e>の綴りの特徴を以下の三つに分けて検討する。

- (1) 子音字<q,γ,n,m,l,y,r>の後に現れる母音字<a/e>
- (2) 子音字<s>の前の語末の母音字<a/e>の表記
- (3) 奪格語尾<-ača/-eče>の前の語末の母音字<a/e>の表記

以下は、(1)~(3)の順に検討する。

(1) 子音字 <q,γ,n,m,l,y,r> の後に現れる語末の母音字 <a/e>

『満洲実録』では、子音字<q,γ,n,r>の後に現れる語末の母音字<a/e>は現代モンゴル文語と同様、離して書かれる場合が多い。

語末の母音字<a/e>が子音字<q,γ,n,m,l,y,r>の後で現代モンゴル文語と同じく書かれる例と現代モンゴル文語と異なって書かれる例を取り上げて、出現回数を示し、現代モンゴル文語の表記と対照してみれば表1のようになる。

表1 『満洲実録』の子音字 <q,γ,n,m,l,y,r> の後に現れる母音字 <a/e> の表記と現代モンゴル文語の表記の対照

子音字	『満洲実録』(語末の母音字<a/e>の現れた表記/回数)		現代モンゴル文語 (<γ>の文字に点がある以外は左と同じ)
	現代モンゴル文語と異なる表記	現代モンゴル文語と同じ表記	
q	共: 3回 ᠠᠯᠠᠭᠠ qalqa(2回) ᠵᠠᠭᠠ ḡaja(1回)	共: 84回 ᠠᠯᠠᠭᠠ qalq_a(53回) ᠵᠠᠭᠠ ḡaḡ_a(31回)	ᠠᠯᠠᠭᠠ qalq_a 「ハルハ」 ᠵᠠᠭᠠ ḡaḡ_a 「周辺」
γ	共: 6回 ᠠᠶᠠᠭᠠᠯᠠᠭᠠ qayaḡa(1回) ᠠᠶᠠᠭᠠᠶᠠᠭᠠ ayaya(1回) ᠰᠠᠨᠠᠶᠠᠭᠠ sanaya(2回) ᠮᠠᠯᠠᠶᠠᠭᠠ malaya(1回) ᠲᠣᠷᠢᠶᠠ toriya(1回)	共: 78回 ᠠᠶᠠᠭᠠᠯᠠᠭᠠ qayaḡ_a(50回) ᠠᠶᠠᠭᠠᠶᠠᠭᠠ ayay_a(3回) ᠰᠠᠨᠠᠶᠠᠭᠠ sanay_a(4回) ᠮᠠᠯᠠᠶᠠᠭᠠ malay_a(7回) ᠲᠣᠷᠢᠶᠠ torḡ_a(8回)	ᠠᠶᠠᠭᠠᠯᠠᠭᠠ qayaḡ_a 「入り口」 ᠠᠶᠠᠭᠠᠶᠠᠭᠠ ayay_a 「碗」 ᠰᠠᠨᠠᠶᠠᠭᠠ sanay_a 「考え」 ᠮᠠᠯᠠᠶᠠᠭᠠ malay_a 「帽子」 ᠲᠣᠷᠢᠶᠠ torḡ_a 「緞子」
n	共: 19回 ᠠᠯᠤᠯᠠᠭᠠᠨᠠ quluyana(1回) ᠶᠣᠶᠢᠨᠠ qoyina(6回) ᠶᠠᠳᠠᠨᠠ ḡadana(5回) ᠳᠣᠷᠤᠨᠠ doruna(6回) ᠲᠠᠨᠠ tana(1回)	共: 175回 ᠠᠯᠤᠯᠠᠭᠠᠨᠠ quluyan_a(4回) ᠶᠣᠶᠢᠨᠠ qoyin_a(152回) ᠶᠠᠳᠠᠨᠠ ḡadan_a(12回) ᠳᠣᠷᠤᠨᠠ dorun_a(6回) ᠲᠠᠨᠠ tan_a(1回)	ᠠᠯᠤᠯᠠᠭᠠᠨᠠ quluyan_a 「ネズミ」 ᠶᠣᠶᠢᠨᠠ qoyin_a 「後」 ᠶᠠᠳᠠᠨᠠ ḡadan_a 「外」 ᠳᠣᠷᠤᠨᠠ dorun_a 「東」 ᠲᠠᠨᠠ tan_a 「珠玉」
m	共: 3回 ᠶᠠᠭᠤᠮᠤᠮᠤᠶᠠᠮᠤ yaγuma(2回) ᠰᠡᠯᠡᠮᠡ seleme(1回)	共: 2回 ᠶᠠᠭᠤᠮᠤᠮᠤᠶᠠᠮᠤ yaγum_a(2回) 現れない	ᠶᠠᠭᠤᠮᠤᠮᠤᠶᠠᠮᠤ yaγum_a 「もの」
l	共: 57回 ᠲᠠᠯᠠ tala(36回) ᠶᠠᠯᠠ yala(13回) ᠡᠯᠡ ele(2回) ᠤᠲᠡᠯᠡ ütele(6回)	共: 48回 現れない ᠶᠠᠯᠠ yal_a(2回) ᠡᠯᠡ el_e(45回) ᠤᠲᠡᠯᠡ ütel_e(1回)	ᠲᠠᠯᠠ tal_a 「平野」 ᠶᠠᠯᠠ yal_a 「罪」 ᠡᠯᠡ el_e 「語気助詞」 ᠤᠲᠡᠯᠡ ütel_e 「平凡な」
r	共: 191回 ᠲᠡᠷᠡ ter_e(23回) ᠰᠠᠷᠠ sara(147回) ᠬᠠᠷᠠ qara(21回)	共: 443回 ᠲᠡᠷᠡ tere(440回) ᠰᠠᠷᠠ sar_a(1回) ᠬᠠᠷᠠ qar_a(2回)	ᠲᠡᠷᠡ tere 「それ、その」 ᠰᠠᠷᠠ sar_a 「(固有名詞) 月」 ᠬᠠᠷᠠ qar_a 「黒」
y	共: 2回 ᠣᠰᠢᠶᠡ ösiye(1回) ᠬᠦᠷᠢᠶᠡ küriye(1回)	共: 2回 ᠣᠰᠢᠶᠡ ösiy_e(1回) ᠬᠦᠷᠢᠶᠡ küriy_e(1回)	ᠣᠰᠢᠶᠡ ösiy_e 「仇」 ᠬᠦᠷᠢᠶᠡ küriy_e 「庭」

表1から見れば、一般名詞では、子音字<q,γ,n>の場合、現代モンゴル文語と同じく離して書かれるのはより多く現れるが、現代モンゴル文語と異なる繋げて書かれる表記も併存している。出現回数の多い、即ち現代モンゴル文語と同じ表記は、『満洲実録』の規範と見なされることが出来る。

子音字<r>の場合は、単語ᠰᠠᠷᠠ sara「月」とᠬᠠᠷᠠ qara「黒」は多くの場合、現代モンゴル文語と異なって書かれる。ᠲᠡᠷᠡ tere「それ、その」は殆ど現代モンゴル文語と同じく書かれる。

子音字<m,l,y>の場合、現代モンゴル文語と同じく書かれるものと異なって書かれるものの両方現れ、出現回数で拮抗していることが分かる。ただ、古典式モンゴル文語ではᠡᠯᠡ eleと表記され

る「語気助詞」はここでは、殆ど $\text{ᠨᠢ} \text{es}_e$ で表記される。

(2) 子音字<s>の後の語末の母音字<a/e>の表記

『満洲実録』では語末の母音字<a/e>は子音字<s>の後は離して書かれる場合がある。

子音字<s>の後の語末の母音字<a/e>の表記と出現回数、及び現代モンゴル文語の表記との比較を示せば、表2のようである。

表2 『満洲実録』の子音字<s>の後の語末の母音字<a/e>の例と現代モンゴル文語の表記との対照と出現回数

子音字	『満洲実録』(語末の母音字<a/e>の表記/回数)	現代モンゴル文語
<s>	$\text{ᠨᠢ} \text{es}_e$ (1:073:7) (138回)	$\text{ᠨᠢ} \text{ese}$ (1:088:1) (26回)
	$\text{ᠪᠠ} \text{s}_a$ (1:118:4) (100回)	$\text{ᠪᠠ} \text{basa}$ (1:046:5) (48回)
	$\text{ᠪᠦ} \text{s}_e$ (6:086:1) (4回)	$\text{ᠪᠦ} \text{büse}$ (8:055:8) (2回)
		$\text{ᠨᠢ} \text{ese}$ 「否定詞」 $\text{ᠪᠠ} \text{basa}$ 「また」 $\text{ᠪᠦ} \text{büse}$ 「帯」

表2から：子音字<s>の後の語末の母音字<a/e>は現代モンゴル文語と同じく繋げて書かれる表記と離して書かれる表記が併存していて、子音字<s>の後の語末の母音字<a/e>が離れて書かれる表記が数多く現れる。

子音字<s>の後の語末の母音字 <a/e> が離れて書かれる表記は、中世紀モンゴル文語では多く現れる。例えば、『孝経』では、「否定詞」 es_e が18回現れ、子音字<s>の後の語末の母音字<a/e>が全て離して書かれる。これから見れば、子音字<s>の後に母音字<a/e>が離して書かれるのは、より古い時代の特徴を継承していると考えられる。

(3) 奪格語尾<-ača/-eče>の前の語末の母音字<a/e>の表記

『満洲実録』では、語末の母音字<a/e>は場所と方向を表す単語（例えば： $\text{ᠨᠠᠮᠤᠨ} \text{emün}_e$ 「南方」）に奪格語尾<-ača/-eče>が来る場合、脱落することがある。

『満洲実録』に現れる奪格語尾<-ača/-eče>の語末の母音字<a/e>の現れる出現回数を表で示せば、表3のようになる。

表3 『満洲実録』の奪格語尾<-ača/-eče>の前の語末の母音字<a/e>の綴りと出現回数

綴り	奪格語尾<-ača/-eče>の前の語末の母音字<a/e>の綴り	
	脱落しない (43回)	脱落する (15回)
例	$\text{ᠨᠠᠮᠤᠨ} \text{ᠨᠠ} \text{emün}_e \text{-eče}$ $\text{ᠤᠮᠠᠷ} \text{ᠨᠠ} \text{umar}_a \text{-ača}$ $\text{ᠳᠣᠷᠦᠨ} \text{ᠨᠠ} \text{dorun}_a \text{-ača}$	$\text{ᠨᠠᠮᠤᠨ} \text{ᠨᠠ} \text{emün-eče}$ (1:004:8) $\text{ᠤᠮᠠᠷ} \text{ᠨᠠ} \text{umar-ača}$ (1:005:3) $\text{ᠳᠣᠷᠦᠨ} \text{ᠨᠠ} \text{dorun-ača}$ (1:005:5)

表3からみれば、『満洲実録』では、現代モンゴル文語と同じく脱落しない表記が現代モンゴル文語と異なる脱落する表記より数多く現れる。語末の母音字<a/e>が奪格語尾<-ača/-eče>の前では、場所と方向を表す単語が付くとき、脱落する場合がある。

3.2.2. 接尾辞の綴りの特徴

『満洲実録』の接尾辞の表記上の特徴は主に、以下の2つに分けられる。

- (1) 「方向」と「～を持っている」を表す接尾辞 ᠳᠠᠳᠤ
- (2) 副詞を作る派生接尾辞 ᠲᠤ

次に、この順で検討していくことにする。

(1) 「方向」と「～を持っている」を表す接尾辞 ᠳᠠᠳᠤ

現代モンゴル文語では、「方向」と「～を持っている」を表す同じ形を持っている接尾辞として ᠳᠠᠳᠤ が現れ、語幹と繋げて書かれる。例：

ᠳᠠᠳᠤ ᠳᠠᠳᠤ dumdadu 「真ん中の」、 ᠨᠢᠷᠡᠲᠦ neretü 「名前を持つ」

『満洲実録』では、「方向」と「～を持っている」を表す接尾辞として ᠳᠠᠳᠤ と ᠲᠤ が現れる。 ᠳᠠᠳᠤ は語幹と繋げて書かれる場合と離して書かれる場合がある。 ᠲᠤ は語幹と離して書かれる。

ここでは、「方向」と「～を持っている」を表す接尾辞の ᠳᠠᠳᠤ を <_du/_dü> で転写し、 ᠲᠤ を <_tu/_tü> で転写する。

「方向」を表す接尾辞を「方向」で、「～を持っている」を表す接尾辞を「持つ」で代表させて、語幹との綴りを表で示せば、表4のようである。

表4 「方向」と「～を持っている」を表す接尾辞 ᠳᠠᠳᠤ ᠲᠤ

意味	綴り	『満洲実録』	
		ᠳᠠᠳᠤ	ᠲᠤ
方向	語幹と繋げて書かれる	ᠳᠠᠳᠤ dumdadu(1:102:7)	
	語幹と離して書かれる	ᠠᠮᠠᠷᠠ ᠳᠠᠳᠤ umar_a_du(1:005:3) ᠳᠠᠳᠤ ᠳᠠᠳᠤ dumda_du(1:184:6)	ᠳᠠᠳᠤ ᠲᠤ dumda_tu(1:172:5)
持つ	語幹と繋げて書かれる	ᠨᠢᠷᠡᠲᠦ neretü(1:013:3) ᠴᠣᠯᠠᠲᠤ čolatu(3:123:2)	
	語幹と離して書かれる	ᠣᠰᠢᠶᠡᠳᠦ ᠳᠠᠳᠤ ösiy_e_dü(1:039:5) ᠶᠠᠷᠢᠶᠠᠳᠤ ᠳᠠᠳᠤ qariy_a_du(1:085:4)	ᠶᠠᠷᠢᠶᠠ ᠲᠤ qariy_a_tu(1:059:4)

表4を見れば、『満洲実録』の「方向」と「～を持っている」を表す接尾辞には、現代モンゴル文語と同じく、 ᠳᠠᠳᠤ の繋げて書かれる表記が現れる以外、現代モンゴル文語と異なる接尾辞 ᠲᠤ が現れることが分かる。

『満洲実録』に現れる「方向」と「～を持っている」を表す接尾辞 ᠳᠠᠳᠤ ᠲᠤ のそれぞれの綴りと出現回数を表で示せば、表5のようである。

表5 「方向」と「～を持っている」を表す接尾辞 ᠳᠠᠳᠤ ᠲᠤ の綴りと出現回数

意味	ᠳᠠᠳᠤ		ᠲᠤ
	繋げて	離して	離して
回数	712回	97回	86回

表5から見るように、<_du/_dü>の現代モンゴル文語と同じように繋げて書かれるのは79%である。現代モンゴル文語と異なり離して書かれる <_du/_dü> は11%、<_tu/_tü>は10%である。

現代モンゴル文語と同じように繋げて書かれるのは、より多く現れるが、離して書かれる <_du/_dü> <_tu/_tü>も併存していることが分かる。

(2) 副詞を作る接尾辞 <_de/_da>

現代モンゴル文語では、副詞を作る接尾辞を表す接尾辞には <_de/_da> が現れ、語幹と繋げて書かれる。

『満洲実録』の副詞を作る接尾辞には <_de/_da> が現れた。副詞を作る接尾辞 <_de/_da> の綴りと出現回数を表で示せば、表6のようである。

表6 副詞を作る接尾辞 <_de/_da>

接尾辞	綴り	『満洲実録』	現代モンゴル文語
<_de/>	語幹と繋げて書かれる	ᠠᠨᠵᠢᠳᠡ yekede(1:035:5) ᠠᠨᠵᠢᠳᠡ qoyisida(8:071:2)	ᠠᠨᠵᠢᠳᠡ yekede 「大いに」 ᠠᠨᠵᠢᠳᠡ qoyisida 「今後」
	語幹と離して書かれる	ᠠᠨᠵᠢ ᠳᠡ yeke_de(1:165:1) ᠠᠨᠵᠢ ᠳᠡ qoyisi_da(1:187:1)	
<_da/>	語幹と離して書かれる	ᠤᠷᠭᠦᠯᠵᠢ ᠳᠡ ürgülji_te(4:103:6) ᠣᠯᠠᠨ ᠳᠡ olan_ta(8:071:1) ᠨᠢᠭᠡᠨ ᠳᠡ nigen_te(3:078:6)	

表6から見るように、<_de/> は語幹と繋げて書かれる場合と分けて書かれる場合がある。一方 <_da/> は分けて書かれる。

『満洲実録』に現れる副詞を作る接尾辞 <_de/_da> の綴りと出現回数を表で示せば、表7のようである。

表7 副詞を作る接尾辞 <_de/_da> の綴りと出現回数

接尾辞	<_de/>		<_da/>
	繋げて	離して	離して
回数	237回	55回	3回

表7からみるように、出現回数の多くは、現代モンゴル文語と同じく繋げて書かれる <_de/> は81%である。<_de/> が現代モンゴル文語と異なって、離して書かれることも少数ではあるが観察される。現代モンゴル文語に現れない <_da/> は3回しか現れない。

4. まとめ

1. 『満洲実録』の文献研究を通して、『満洲実録』のモンゴル語の編纂に際して、それ以前の実録のモンゴル語を参照する可能性があったといえることができる。
2. 『満洲実録』は1781年に清朝の皇帝の命により、文人たちを集めて編纂したものであり、そのモンゴル語は当時の公的な規範を示そうとした書き言葉とみなすことができる。
3. 『満洲実録』のモンゴル語は、当時の公的な規範を体現している書き言葉と考えられるが、全8巻のモンゴル文字の表記について、それらの形（綴り）と出現回数を全巻に渡って、網羅的に調査して、出現回数の多い規則的な現れ（特徴）と、出現回数の少ない例外的な現れに分類した。

出現回数の多い規則的な現れは、当時のモンゴル語の規範を示しているといえる。少数の例外的な現れは、より古い時代の特徴が残存しているものであることが考えられる。具体的には、以下のようなものである。

- ① 子音字<n>は母音字の前に位置する場合、点を持たない字形が少数現れる。

例：ᠠᠶᠠᠳᠤᠨ' ayad=u-r_a 「遊びに」。

- ② 子音字<č>の中位形に ᠴ 以外に ᠴᠢ も現れる。例：ᠣᠵᠢ' i=besü 「言えば」。

- ③ 子音字<q, γ, n>の場合、現代モンゴル文語と同じく離して書かれるのはより多く現れるが、異なる繋げて書かれる表記も併存している。例：ᠵᠠᠭᠠ jaqa 「周辺」。

- ④ 子音字<s>の後の語末の母音字<a/e>は語幹と繋げて書かれる表記と離して書かれる表記が併存していて、語幹から離して書かれる表記が比較的に多く現れる。離して書かれるのは、より古い時代の特徴を継承していると考えられる。

例：ᠮᠤᠯᠡᠰᠡ es_e 「(否定詞) ~ない、~しない」、ᠪᠦᠰᠦ būs_e 「布」

- ⑤ 奪格語尾<-ača/-eče>の前に現れる語末の母音字<a/e> が脱落する場合がある。

例：ᠡᠮᠦᠨ emün-eče(1:004:8) 「南方から」、ᠤᠮᠠᠷ umar-ača(1:005:3) 「北方から」

- ⑥ 「方向」と「~を持っている」を表す接尾辞 ᠳᠦ ᠳᠦᠳᠦ は現代モンゴル文語と同じく繋げて書かれるのが、数多く現れるが、語幹から離して書かれる ᠳᠦ <_du/_dü> ᠲᠦ <_tu/_tü> も併存している。例：ᠳᠤᠳᠤ dumda_du(1:184:6), ᠳᠤᠳᠤ dumda_tu(1:172:5)

- ⑦ 副詞を作る接尾辞 ᠳᠡ ᠳᠡᠳᠡ は現代モンゴル文語と同じく繋げて書かれるのが、数多く現れるが、離して書かれる ᠳᠡ <_da/_da> ᠲᠡ <_ta/_ta> も併存している。

例：ᠶᠡᠬᠡ yeke_de(1:165:1) 「大いに」、ᠤᠷᠭᠦᠯᠵᠢ ürgül_ji_te(4:103:6) 「常に」

第1章の文献学的研究により、これらがより以前に編纂された太祖実録の古い表記を継承している可能性がある。

4. 同じ働きを持つ異なった形式が出現回数で拮抗している場合がある。自由に交替して使われるのが規範であったか、あるいは規範が確立していなかった可能性がある。

子音字<m, l, r, y>の後に現れる母音字<a/e>は現代モンゴル文語と同じく離して書かれるものと異なって繋げて書かれるものがある。

例：子音字<m>の場合、ᠮᠠᠶᠤᠮᠠᠵᠤ yayuma, ᠮᠠᠶᠤᠮᠠᠵᠤ yayum_a 「もの」。

子音字<l>の場合、ᠯᠠᠯᠠ yala, ᠯᠠᠯᠠ yal_a 「罪」。

子音字<r>の場合、単語ᠰᠠᠷᠠ sara 「月」と ᠬᠠᠷᠠ qara 「黒」は多くの場合、現代モンゴル文語と異なって書かれる。ᠲᠡᠷᠡ tere 「それ、その」は殆ど現代モンゴル文語と同じく書かれる。

子音字<y>の場合、ᠥᠰᠢᠶᠡ ösiye, ᠥᠰᠢᠶᠡ ösiy_e 「仇」。

これらは、文献学的研究によれば、より以前に編纂された太祖実録の古い表記を継承している可能性が大きいと考えられる。

参考文献

[欧文]

POPPE, NICHOLAS 1974 *GRAMMAR OF WRITTEN MONGOLIAN*, OTTO HARRASSOEITZ, WIESBADEN.

[日本語]

今西春秋 1992『満和・蒙和对訳満洲実録』刀水書房。

上原久 1960『満文満洲実録の研究』不昧堂書店。

河内良弘 1996『満洲語文語文典』京都大学学術出版会。

栗林均、呼日勒巴特尔編 2006『「御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑」モンゴル語配列対照語彙』(東北大学東北アジア研究センター叢書第20号) 東北大学東北アジア研究センター。

服部四郎 1987『アルタイ諸言語の研究Ⅱ』(服部四郎論文集2) 三省堂。

早田清冷 2008『『満洲実録』モンゴル語の存在を表す動詞 bayi-について』『語学教育フォーラム』東洋大学、第16号、169-191頁。

松村潤 2001『清太祖実録の研究』(東北アジア文献研究叢刊2) 東北アジア文献研究会。

山崎忠 1950「満洲実録文字攷一対訳蒙古文にあらわれた一二の異例を中心として」『天理大学校学報』第5号、117-149頁。

[中国語]

M.H.奥尔洛夫斯卡娅著、郭守祥译 2004《黄金史语言》(阿尔泰丛书)、内蒙古教育出版社。

陳捷先 1978《満文清実録研究》(《満文瑞案叢考》第一集) 大化書局。

内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所編 1999《蒙汉词典(增订本)》内蒙古大学出版社。

清格爾泰 1991《蒙古语语法》内蒙古人民出版社。

乌兰其木格 2012《清代官修民族文字文献編纂研究》(中国蒙古学文库) 遼寧民族出版社。

[モンゴル語]

道布 1983《ᠠᠨᠠᠭᠤᠯᠠᠭᠤᠨ ᠮᠣᠩᠭᠤᠯ ᠤᠰᠦᠭᠦᠨ ᠳᠤᠷᠠᠰᠠᠯᠲᠤ ᠪᠢᠴᠢᠭᠤᠳᠤ uyiyurjin mongγul üsüg-ün durasqaltu bičig-üd (回鹘式蒙古文文献汇编)》内蒙古民族出版社。

嘎日迪 2001《ᠣᠷᠴᠢᠨ ᠴᠠᠭᠤᠨ ᠮᠣᠩᠭᠤᠯ ᠬᠡᠯᠡ orčin čay-un mongγul kele (现代蒙古语)》内蒙古人民出版社。

嘎日迪 2008《ᠳᠤᠮᠳᠠᠳᠤ ᠡᠷᠲᠡᠨᠦ ᠤᠮᠣᠩᠭᠤᠯ ᠬᠡᠯᠡᠨᠦ ᠰᠤᠳᠤᠯᠤᠯᠤᠨ ᠤᠨᠠᠳᠤᠷᠢᠳᠠᠯᠤ dumdadu erten-ü mongγul kelen-ü sudulul-un uduridqal (中古蒙古语研究导论)》内蒙古人民出版社。

策·諾尔金 2006《ᠮᠣᠩᠭᠤᠯ ᠪᠢᠴᠢᠭᠤᠨ ᠬᠡᠯᠡᠨᠦ ᠶᠣᠯᠢ ᠶᠣᠰᠤ mongγul bičig-ün kelen-ü γoul yosu (蒙文原理)》内蒙古教育出版社。

斯琴高娃 2007《17ᠳᠤᠶᠠᠷ ᠵᠠᠶᠤᠨᠤ ᠡᠮᠦᠨᠦ ᠶᠠᠭᠠᠰᠤ ᠤᠶᠡᠶᠢᠨ ᠮᠠᠨᠵᠤ ᠮᠣᠩᠭᠤᠯᠤᠨ ᠴᠠᠷᠢᠯᠴᠠᠶᠠᠨᠤ ᠪᠢᠴᠢᠭᠤᠳᠤᠨ ᠲᠤᠬᠠᠢ ᠰᠤᠳᠤᠯᠤᠭᠠ 17duyar jāyun-u emün_e qayās üy_e-yin manju mongγul-un qarilčayan-u bičig-üd-ün tuqai sudulγ_a (17世紀前半叶满蒙关系文书语言研究博士论文)》内蒙古大学博士论文。

執筆者：烏燕嘎 (Uyanga)

所属機関：東北アジア研究センター

メールアドレス：uyunbilig_uyanga@yahoo.co.jp

